

目的：日本での洋装化の一事象として指摘されている洋傘の導入及び普及について取り上げ、洋傘に託した明治期の庶民の服飾感情を考察する。

方法：当時の風俗を記した「東京風俗志」を始めとする資料から、洋傘の流行の様相を検証する。さらに染織品、服飾品の遺品の中からデザイン化された洋傘を収集し、日本人の洋傘意匠への志向を考える。

結果：欧米のparasol, umbrellaは日本に紹介されて、涼傘（ひがさ）、蝙蝠傘（こうもりかさ）の俗名でよばれた。しかし慶応3年の『武江年表』の中には西洋の傘を『和俗蝙蝠傘といふ、但し、晴雨ともに用ふなり』との一節があることから、蝙蝠傘の呼称の方がより総括的であったと思われる。

デザインは明治期を通して華美、多彩となったことが、『男持には甲斐絹・綾甲斐絹・綾毛縹子・瓦斯・紋毛縹子等を用ひ、盛夏には白の絢緞張最も行はる。婦人持は、三四年來、令嬢形（一に美人傘）と称して、深張を好むで、用ひ、その奢りなるは琥珀・緞子・紬を以て張れり。・・・』（「東京風俗志」）などから読み取れた。西洋では淑女の装いの仕上げとしてパラソルは認識されていたのに対して、日本では男性及び男児にも日除けとして用いられていたことは特徴的である。

同時代の庶民の日常染織品としての木綿模様型染裂・緋裂に、また簪の細工に洋傘のデザインが見られた。これらは文明開化の風俗を伝えるデザインといわれている。だが伝統的な唐傘文様の表現に馴染みをもつ日本ではその図像的好みを考慮すべきと考えた。